



第57回「おかねの作文」コンクール

秀作

あたたかいお金

千葉県・専修大学松戸中学校 3年 王 右伊

ワシントンが描かれた銀色の硬貨と、同じ色の一回り小さい硬貨が大理石のテーブルの上にカチャッと音を立てて置かれた。それと「Have a nice day.」という言葉はほぼ同時に聞こえた。これは、ある夏の暑い日にアメリカ中西部のカフェで起こったことだ。

私は学校の修学旅行で、アメリカを訪れた。言葉は全くわからないが、表情やジェスチャーの表現を上手にすれば大丈夫、という謎の自信を持ったまま、初めて吸うアメリカの空気を味わっていた。しかし、現実はそう甘くはない。言語の壁はもちろん、環境や生活習慣、価値観など、日本と異なっている部分があまりに多かった。私は、地球上で日本の真反対にいるのだから、何もかも違っていても何もおかしくはないな、となぜか納得してしまうほど、想定外な困難はたくさん降りかかってきた。そして、その中でも特に私が苦しく感じたのは、会計の瞬間だった。学校のルールで、現金しか使ってはいけないのにも関わらず、コインの種類やお札を使うタイミング、お釣りの計算などがわかっていなかったためスムーズに会計ができなかったのだ。

ただでさえ、キャッシュレスが普及し、カード社会であるアメリカで、計算もできないくせに現金を使い、さらには言葉すらあまり伝わらない外国人は、まさか私であるとはどうしても思いたくなかったのだ。そのため、今まではなるべくセルフレジや友だちに頼ってきたが、ついに一人で店員さんとやり取りをしなくてはならない状況になってしまった。案の定、私はパニックになってしまい、店員さんや後ろで並んでいる他のお客さんに迷惑をかけてしまった。もう買うのをやめようと思ったその時、「もしかして日本人なの」と英語で話しかけられた。声がした方を見たら青い瞳が特徴的な白髪の優しそうな婦人だった。「はい…。」と答えた私は、この優しそうな婦人を待たせすぎて、怒らせてしまったのかと思いきや心臓が飛び出そうになった。ところが婦人は全く私を責めず、2ドルのお札

を店員に渡し、ポケットを探りながら、私を思いやるような言葉をかけてくれた。そして、25セントと5セントの硬貨を置き、歌うように「Have a nice day.」と言ったその声は今でも忘れない。

私は今までお金とは、個人が社会にどれだけ貢献し、また、それによる恩恵がどれくらいの価値があるのかを数値化したものだと思っていた。しかし、今回のこのような出来事を通して、私はその考えを疑うようになった。

物々交換という言葉がある。辞書で意味を調べてみると、「貨幣を媒介としないで物と物とをじかに交換すること。」とあった^{注)}。つまり、当事者同士で物の価値を互いに納得するまで見極め続ける必要があると思う。そこには、必ず、人同士の思いや気持ち、願いを共有する場面があるはずだ。これによって、人々は取り引きに情が生まれ、様々な感情を抱く。ところが、物々交換には最大の欠点がある。それは、時間や労力がとてもかかり、非効率的であることだ。そこで、通貨が登場したのだと思う。持ち運びに便利で、物の価値の比較が容易だ。それに、何よりも求められた金額のお金を出すだけで取り引きは成立する。やがて時代は進み、ついに通貨はもう実在しないものへと変わろうとしている。これにより、取り引きはさらに簡略化され、人々は効率よく物を手に入れられるようになった。今では、ネット通販やネットオークションなど、もはや取り引きに関わる全ての人に会わなくても買い物ができる、便利な時代になった。

しかし、私は本当にこれで良いのか、とも思う。あのアメリカの婦人のように、人が関わってこそその温もりがあるはずだ。思い返せば、常連だから付けてもらえるおまけ、お釣りを渡される時に触れ合う手、「ありがとうございました。」という声。これらは全て人同士がその空間にいるからこそ、起こりうる出来事だ。また、店員と客だけに限った話だけではない。同じ消費者である客同士でも、店などの「場」があるだけでつながりは持てる。たまたま同じ商品に目を付けて仲良くなる人、おつかいにきた小さな子どもを助ける人、どちらも目にしたことがある。あのアメリカの婦人も良い例だ。だが、このようなことは、人々が心を開き、時間をかけてでも、つながろうとする姿勢があるから起こる。さらにスマートに、速く、効率よくしていこうとする社会とは真逆の行動だ。しかし、物の価値を表すお金では、測りきれないあたたかさがここにはある。

(注) 北原保雄編『明鏡国語辞典 第二版』大修館書店 2010年